
シンポジウム

論題 中世哲学と現代

—真理と生—

司会 慶應義塾大学 中川 純男

提題：特権的真理と懐疑主義の間に
京都大学 川添 信介

提題：「意志」概念の形成と変容
東京都立大学 神崎 繁

提題：〈愛知〉としての〈哲学〉と哲
学の〈制度化〉
早稲田大学 八巻 和彦

(於 神田外語大学 2000.11.12)

司 会

中 川 純 男

今回のシンポジウムは、「中世哲学と現代」という総合テーマのもとで行われる第二回目であり、昨年の「国家と正義」に続くものである。現代的意義を問うことは、現代に欠けていることがなお現代に必要であることを明らかにしなければならないという、二重の課題に答えようとするものであるが、三人の提題はこの困難な課題にそれぞれの立場から明解な指針を与えるものであったと思う。川添氏の提題は、現代の思想状況を特権的真理の不在と把握した上で、中世哲学のおかれた状況との相違を強調しつつも中世哲学が特権的真理に知られざるものとしてかかわったことに注目し、この点において中世に神学と呼ばれたものをわれわれが哲学として捉え直すなら、われわれの生に共有できる意味を確保しようとする営みとして中世哲学の研究が現代的意義をもちうることを明らかにされた。これに対し、神崎氏の提題は、中世哲学研究が哲学史研究として現代の哲学的な問題状況に寄与しうるものであることを、意志概

念に注目しつつ明らかにしたものであったといえよう。八巻氏の提題は、哲学の制度化が哲学という営みにとっては危機的であると指摘し、哲学の本質に立ち帰り、「わたしにとって」という視座からの哲学の意義を問い直す必要を鋭く問いかけるものであった。

それぞれの提題は、いずれも中世哲学の具体的な問題研究に支えられたものであり、中世哲学が現代に問いかけることのできる哲学であることを身をもって示したものとされたことにも注目したい。あるいはこのことは、中世哲学が、あるいは中世の哲学者がその生きた時代と深くかかわることによって獲得した思想そのものの力であるということができるかもしれない。「現代」の自己理解においてもなお、その力の有効であることが、三人の研究者を通して明らかになったことを今回のシンポジウムの最大の成果としたい。

提 題　特権的真理と懐疑主義の間に

川 添 信 介

はじめに

現代の日本において西洋中世哲学を学び研究するというに、いかなる意義を見いだせるのであろうか。本提題では「日本において」という側面については触れ得ないので、問題は「現代において西洋の中世哲学を研究することはどのような意味を持つと考え得るのか」ということだけになる。それにしても大上段にかまえたこの問いかけに、何がしかの解答を提示することが私の意図である。この問いに対しては、さまざまな角度から答えを与え得るであろうし、実際に研究を進めている方々はそれぞれの仕方と答えを与えておられるのであろう。しかし、言うまでもないが、中世哲学を研究しているわれわれ自身は中世に生きているわけではない。このことは哲学の歴史的研究（哲学史研究）と哲学そのものとの関係をどのように捉えるのか、あるいはさらに哲学とは何なのかという、より大それた問題と連関することになる。